空間・社会・地理思想 6号 142-149頁，2001年
Space, Society and Geographical Thought

記憶の行為ならびに千年紀の希望と不安
——経済的なものと文化的なもののぎこちない関係——

リンダ・マクドウェル*
（加藤 政洋** 訳）

Linda McDowell
Acts of memory and millennial hopes and anxieties:
the awkward relationships between the economic and the cultural
Social & Cultural Geography, Vol. 1, No. 1, 2000, pp. 15-24.

序

新しいはじまりは——そしてそれは、新しい世紀のみならず新しい千年紀を迎えるとき、際立ったものとなる——、不安ばかりでなく、過ぎ去った時代の省察とこれからむかえる時代の思索を引き起こすものである。だが、わたしはあえて地理学に多大な影響をおよぼした研究を振り返り、そして将来を見据えて現在進行中の興味深い新しい研究のありかを示してみたい。幸いにもこの冒険にいどむのはわたしだけではない。地理学とフェミニズム——わたしがもっとも身近に接している二つの分野——では、こうした不安に満ちた省察や思索の傾向が現在はっきりとみられる。例えば、著名な研究者は過去と未来の研究に関する省察を含む著作を最近出版した。二人を例にとろう——デイヴィド・ハーヴェイとリン・セガルであり、二人の回顧と思索は、その類似性と相違という点で興味深いものである。もちろんこの二人をランダムに選んだわけではなく、特定の目的にそっている。二人はどちらも、重要な問いやアプローチが 1970 年代初頭頃から変化してきたなかで、わたしが本稿で論じようとおもっている問題の多くに取り組んでいる。すなわち、経済的諸過程と文化的諸過程の関係の本質、批判的かつ進歩的な視角をどのように維持するのか、そしてより公平な社会向けてどのように進んでゆくのかということを指し示す問題である。

現在わたしたちがポスト・フォーディズムと呼ぶ時代のなかで、「先進」工業社会の経済的・社会的な世界の注目すべき本質的な変化は、一連の理論的変化や経験的研究の新しい焦点を生じさせてきた。物質的な文化のみならず意味や表象の問題に力点をおいて省察する「文化的転回」という語に要約されるようになった動向は、過去 20 年間あるいはそれ以上にわたって人文地理学に顕著な影響をおよぼしてきており、この学問領域を構成するいくつかの部分を活気づけると同時に、ものの見方や行動の仕方、そして革新的な理論的アプローチといった新しい研究分野を開示した。サブディシプリンである経済地理学では、そうした新しいものの見方は論議の的となってきており（Barnes, 1995; Sayer, 1994, 2000）、物質的商品は「ソフト」資本主義の刺激的な分析（Thrift, 2000a）のみならず、さまざまな空間的スケールでの経済的諸過程がローカルな社会的諸過程ならびに制度的個別性とに埋め込まれる様式についての新しい理解（Gertler, 1995; Hertz, 1998; McDowell, 1997; Peck, 1995; Weiss, 1999）に関連づけられてきたが、むしろ、ますます経済には重きをおかなくなり（Coyle, 1997; Leadbeater, 2000; Quash, 1997）、ますます支配的になった情報関連商品は記号と意味（Lash and Urry, 1994）そして消費者本位の見世物的なイヴェントの生産（Philo and Kearns, 1994）を基礎としてきた。ナイジェル・スリフトによれば（Thrift, 2000a）、文化的転回とは、経済的なものの様

* ロンドン大学
** 流通科学大学

態ならびに経済として規定されるものの双方にそのような影響力がおよびはじめることであり、「パンドラの匣は開けられてしまい、もはや閉めることはできない」。とはいえ、他の論者たちは、政治経済アプローチ（Harvey, 1996, 2000; Sayer, 1995）もしくはアップデートに統計的に洗練された立地分析（Krugman and Venables, 1995）のどちらであれ、古典的なアプローチがいまだ有意であることを力説し、資本主義経済の搾取と空間的な不均等発展の強固なパターンを完全に理解するに際して、社会・文化理論における新しい展開にどれほどの価値があるのかと疑義を呈してきた。セイヤー（Sayer, 1995）とハーヴェイ（Harvey, 2000）が論じたように、ラディカルな政治経済学からの離脱はパラドキシカルであった。というのも、1990年代におけるアメリカ合衆国と多くのヨーロッパ諸国の経済的分割のあり方はこれまでの時代よりも19世紀後期のそれに類似しているからである。

いくらか類似した軌道と類似した議論がフェミニストの理論家のあいだにもはっきりとみられた。そこでの社会・文化理論への同一の転回は、女性抑圧の物質的構築から、女性のあいだの多様性と差異について、つまり、多様な男性性ならびに女性性の社会的・文化的な構築とアイデンティティの不安定性に関する新しい問いへと、フェミニストの学究において力点が変化したことに反映されている。ここでもまた、「経済的なもの」と「文化的なもの」、フェミニストの議論で女性の従属の基盤として不均衡分配と誤認と呼ばれるようになったものの緊張が明らかになる（Butler, 1998; Fraser, 1997a, 1997b; Phillips, 1997; Young, 1990）。わたしがここで主張したいのは、こうした対立は不要であり誤解であるということだ。「経済的なもの」と「文化的なもの」の（ゴードン・クラーク（Clark, 1998）の言葉を軽めに濫用すれば）「緊密な対話」は可能であるばかりか望ましいことである。そのような主張はたいてい経済地理学者の面前でなされるわけであるが、この新しい雑誌の文脈では、この主張の目的は反転される――つまり、本誌で経済的な諸問題や諸過程を無視しないことを請願するものであり、紛れもなく社会地理学者や文化地理学者に向けられている。

さて、ここで二人の理論家にもどり、両者ともに近著を記憶の行為から書き起こしていることについて取り上げることからはじめてみたい。

デイヴィド・ハーヴェイは、新しい著作『希望の空間』を「世代が生じさせる差異」について省察することからはじめている（Harvey, 2000）。特徴のない個人的な文章のなかで、彼は学生の求めに応じて1971年以来毎年つづけてきたマルクスの『資本論』（第一巻）の講読講座と時代の物質的環境のパラドキシカルな関係を記している。この関係の詳細はここでの問題ではないが、その章の議論全般ならびにその著作全体がハーヴェイの長きにわたるプロジェクト――弁証法的唯物論意義を存続していることを示すこと――の一部をなしている。ハーヴェイは、マルクス主義理論が有意でありつづけていることが20世紀の最後の数十年間で多くの社会理論家たちによって不当にも無視されてきたと信じ込んでしまっており、この時代をハーヴェイは、「アイデンティティ・ポリティクスとあの有名な文化的転回というよき時代」であり、「文化分析が政治経済に取って代わった（前者は、たいてい、陰鬱な世界や資本主義的搾取のぶつかりあうリアリティのなかに熱心に入り込むよりは、とても楽しいものとなるはずだ）」（Harvey, 2000, p. 5）時代であるとする。この主張には中身があるが、「陰鬱として現実的」であるところの政治経済と楽しみであるところの「ジェンダー、人種、セクシュアリティ、人間の欲望、宗教、エスニシティ、植民地支配、環境などなどの諸問題」に対するアプローチとを批判的に比較することで（Harvey, 2000, p. 5）、薄められてしまっているのではなかろうか。だが、地理学者を含む現在の社会・文化理論家を混乱させてきた複雑性と多様性についてのあらゆる問いに対する答えはマルクスの著作とそれを展開したものとに見出されるとハーヴェイが信じている楽しみもまた、時代遅れなのである。わたしは、必ずしも厳密な政治経済的な視角からではないが、もっとも活気のある理論家の多くが現在のところ経済的諸問題についての研究でしているように（例えば、Lee and Wills, 1997やClark, Gertler and Feldman, 2000に所収の論文を参照）、物質的不平等、不均等発展、搾取、そして新しい排除のパターンに関するますます真剣な問いへの地理学的探究の刷新された焦点に対するハーヴェイの誓願に部分的には同意するが、搾取の多様な軸のオルタナティヴな理解の仕方を暗黙裡に軽視することは受け入れがたい。この点で、アンドリュー・セイヤーは「ほとんどの現象を階級の効果として取り扱う試

み」にとくに起因する政治経済の意図的な沈黙について、思慮にとんだ分析をおこなっている（Sayer, 1995, p. vii）。とはいえ、『希望の空間』で見事なのは、その強力なコミットメントである。もちろんそれは、ハーヴェイの学究全体の中心にある対決的かつ変革的なポリティクスへのコミットメントだ。

ほかの分野、とくにフェミニズムの学問分野では、「経済的」そして「文化的」と伝統的に区別されるそういった諸過程の関係について、あまり偏りのない議論がみられる。リン・セガルの近著『なぜフェミニズムか』（Segal, 1999）の序章は、同種の問いに対するデイヴィド・ハーヴェイのアプローチとはあまりに対照的な方法を提示している。リン・セガルもまたデイヴィド・ハーヴェイのように同書の序章では学問の世代の差異について省察している。彼女も経済的なものと文化的なものとして広く定義される事柄同士の関係に関心をよせ、フェミニスズムの学問分野が 1960 年代末より展開されてきたあり方の省察をとおしてたどってゆく。彼女が述べるように、多くのフェミニストのあいだで「内省的転回」（Segal, 1999, p. 1）がみられたものの、フェミニズムはラディカルな変革的ポリティクスにコミットしつづけている。ハーヴェイのようにセガルは、地理学の変化と並行するフェミニスズムの学問分野における変化を記録している――すなわち、経済的不平等の唯物論的分析からアイデンティティの言説的構築と不安定性に関する最近の研究への移行であり、セガルが述べているように、それは、政治的－経済的な再編、そして公共の生活や福祉の改変の追求を優先した初期フェミニズムのプロジェクトのように、社会構造・関係・実践に相当に留意するものとはまったく異なるプロジェクトである（Segal, 1999, p. 13）。

またハーヴェイのごとくセガルは、まさに「女性たち自身の不平等と分割が劇的に深まりをみせた」時期にそのような言説的移行が生じるというアイロニーを指摘する（Segal, 1999, p. 2）。とはいえ、セガルは、新しい理論的アプローチの意義に関する認識において意見を異にしている。彼女は、「社会的不平等とジェンダーの公正という広範な問い」と「アイデンティティと属性の問題」とを並置すること、つまり「フェミニズムの領域を拡張する」ことに熱心であるが、正しくポスト構造主義フェミニストの集合的記憶の過ちを非難している。彼女が指摘するように、近年のフェミニズムの歴史を展望する現在のテクストは、現在の関心をつうじて過去が読まれるというありのままの事例を提供している。要するに、初期の意味やプロジェクトを無効にするのみならず、それらの異質性を消去しているのである（Segal, 1999, p. 11）。

皮肉なことに、それらの異質性・多様性・差異へのコミットメントにおいて、現在、多くのポスト構造主義の理論家たちは、女性の従属に関する初期の理論化が史的・地理的ヴァリエーションの認識を中心にすえた地域・比較研究に基礎づけられていたという点を否定するのである[1]。さらに、その時代（1960 年代末から 1970 年代初頭）の複雑なポリティクスにおいて、当時の広範な左派のポリティクスに共通して関心をよせた女性たちは、連合と党派に関する終わりのない議論に行き着いた(Rowbotham, 1989, 1999; Rowbotham, Segal and Wainwright, 1980 を参照)。だが、セガルがきちんと述べているように、時代はもはや異なるのだ。世紀の変わり目にあって、「女性および男性個人の経験における複雑性と闘争、つまり、権力と同様に男性性のイメージの回復力が、変わりゆくジェンダーのダイナミクスの現実性ならびにジェンダー化されたセクシュアルな自己の脆弱性によって揺さぶられる」（Segal, 1999, p. 8）という新しい問題が、経済的なものと社会的／文化的なもの、つまり、物質的な不平等と、新しい社会分割／権力の表象の複雑な結びつきとを理論化する新しい方法を要求しているのである。これは、わたしが本誌に取り組みを求めたい理論的・政治的なプロジェクトである。

文化的なものを経済的なものに挿入する

以下でわたしは、再編と変化にさらされている現代経済の諸過程を理解する方法のいくつかを概論しようとおもうが、それらは、多くの経済地理学者がしているよりも真剣に文化的な意味・表象・実践の問題を取り上げることで深められることだろう。わたしはこの取り組みを二つの空間スケールでおこないたい――それは組織と個人の空間スケールであるが、この場合どちらも、ロカリティ・地域・国家の間の地理的分化や空間的不均等に関する問いが一般的にその焦点となっている伝統的な地理学的分析よりも、比較的小さな空

間スケールとなっている。わたしの事例では、労働市場と職場におけるジェンダー分割とジェンダー化されたアイデンティティの社会的構築の多様性を強調するものとなる。とはいえ、経済的な行為や決定における社会的・文化的なものの分かちがたい中心性に関する多くの説明が他にもある。それらは、調査にとって魅力的な新しい問いを開示してもいる（経済的なものの文化的形成に関する新しい研究から浮かび上がったキーとなる問いに関するスリフトの最近の概論（Thrift, 2000a）、同じくべつの分野の新しい研究に関するわたしの要約（McDowell, 2000a）も参照）。

組織の文化

ディシプリンの将来的な方向性に関する思索、あるいはそのわずかな部分的試みは取るに足らないものかもしれないが、はばひろくディシプリンのなかで新しくわきあがっている、組織、とくに企業や法人の文化の本質と意義に関する問いへの関心は、経済地理学者にとってますます重要なものとなるようにわたしには思えるのである。近代企業に関する研究には20世紀初頭にまでさかのぼる長い伝統があるが、その関心は大方、組織行動の合理的基盤、科学的管理、経済的モデリングにあった。しかしながら、最近20年間では、職場における社会的相互作用、権力、社会的統制に関する新しい問いが経済社会学で重要となってきており、スウェルサーとスウェッバーグは、「社会的ネットワーク、ジェンダー、文化的コンテクストといった特定の視角もまた中心になってきた」（Smelser and Swedberg, 1994, p. 3）と述べている。学問的にも実践的にも急速に拡大する研究は、今では、新しい経営形態や企業内の部局間の人間関係の重要性の高まりとの関連で、企業文化に関する問題を取り扱っている。

わたしは、このような新しい論点には多くの理由があることを指摘しておきたい。社会理論家、人類学者、文化・文学理論家、歴史学者、社会学者、そして地理学者の間では、文化という概念は革新的な再定義の主題であった。文化という考え方は、「一つの全体として統合された自己充足的な社会集団とその生活様式という意味」から、「まとまりのある集団もしくはコミュニティといまだに定義されてはいるものの、その変わりゆく環境のなかで多方向からの形成にも同時に開かれているような、ひじょうに可変的で、柔軟なひとつの実体であり、そしてもっとも重要なのは、そのひじょうに独立的で、手におえないことさえある成員の間で、たえず議論され競合された構築物の帰結であるという意味」（Marcus, 1998, p. 6）に移行してきた。

だがもちろん、文化は必ずしも均質ではないとする考え方は新しいものではない。テリー・イーグルトンは、最近、文化という概念を再評価するなかで、50年以上も前のつぎのようなフランツ・ボアスの主張を引用している（Eagleton, 2000）。「まったく異質なふるまい、志向、行為が並んである」（Boas, 1940/1982, p. 30, Eagleton, 2000, p. 14における引用）。しかしながら、このコメントは、「原始的」な文化についての省察である。その洞察を「文明化」された文化や制度に移し変えるのに数十年かかり、たいがいの学者のように素寒貧になった人類学者は、ありふれたものを異質なものにするためにみずからの所在地にますます回帰するようになったのである。

学問的テクスト（レギュラシオン理論、ポスト・フォーディズム、フレキシブルな専門化）に横溢するようになった経営に関する実践的言説や新しい経済理論もまた、経済生産の組織における物質的な変容を反映している。例えば、1980年代から1990年代初頭にかけての「西洋」における「外国文化」から、あるいは産業組織のメソッドと企業文化がビジネスの成功を確実なものとしている日本から生じている競争は、新たな行動様式へと導いた。だが、企業文化への関心と分析をそのように勢いづけているのは、主として経済生産のグローバル化である。ますます支配的になりつつある国境を越えて活動する多国籍企業は、逆説的にも、現場／国家間の文化的差異の重要性と組織内の画一的な文化的実践とに留意する必要がでてきたのである。経済地理学と文化地理学の古い境界線を乗り越える新しい分析の広がりへの関心は、一方の国際的なビジネス文化、グローバルな言説、コスモポリタンの労働力に関して、そして他方の地元／地域／国家のニーズの経営の多様性、文化的態度、異なるビジネス実践に関して生じている。新たに強調されている「地元＝自国home」の組織文化から境界線を越えて展開される組織文化への移行は、経済的なグローバル化で作用する基本的な要素である（例えば、Jones, 2000を参照）。

こうした新しい研究は革新的で、経済地理学にとって魅力的な新しい焦点を提供しているわけであるが

(Amin and Thrift, 2000 も参照)、警告のことばも適切である。アカデミックな理論家と企業の経営者のあいだで文化概念への関心が同時に発生していることは物騒ぎでもあるのだ。それはもろもろの利害の調節を必要としないことはたしかだが、少なくとも批判的な理論家に問題を提起することになる。マーカスが指摘するように、「資本主義の主要な制度の外側にあるいはそれとは知的に独立していると自らを定義づけてきたアカデミクスや文化批評家には、文化概念をつうじてのこのような密接な関係をして、みずから企業に関する批判的な距離と視角を確保するというもっともなじみのある戦略を剥奪している」(Marcus, 1998, p. 8) のだ。

個人のアイデンティティと差異

「文化的転回」は、分業および職場アイデンティティの社会的構築に関する研究にも多大な影響をおよぼしてきた。1970 年代以降に展開した労働市場の分割に関する理論は、エスニシティ・ジェンダー・年齢の社会的分割が労働者の利益を分断するために資本によってどのように搾取されているのか、そして表彰と報酬のヒエラルキーをどのように構築するのか、といったことなどを説明することに価値を見出さなくなってきた。しかしながら、そういった分析では (例えば、Hanson and Pratt, 1995; Redclift and Sinclair, 1991 を参照)、労働者はすでに場所にかなり固定された社会的特色を有する職場に組み込まれているものと仮定されている。フェミニスト社会学と経済学ならびに組織研究がこの 10 年間に調査しはじめたなかでもっとも興味深い研究には、組織的実践と日常行動が労働者の流動的で多様なアイデンティティを構築する、というものである。上記の組織の事例のように、ポストモダンならびにポスト構造主義の理論家の理論的主張は、アイデンティティは労働の組織化と再編に際して新たな問題が生じるのと同時に、暫定的に、流動的に、そして言説的に構築される、というものである。ほとんどすべての工業国ならびに工業化する諸国 (1990 年代初頭のかつての社会主義社会を除く) の労働力に参入する女性の数の増大は、例えば、賃金労働の男性および男性性との共同、ならびに、合理的で感情のない実体のない領域ないしは英雄的な男性性と身体的強度を誇示するアリーナのどちらかでしかない職場に挑戦した。就職と昇進という職場の実践を支配してきた男性の優越と女性の劣等という前提、つまり、給与体系と日々の社会的相互作用は、幅広い組織のなかで研究され挑戦されるようになったのである。

産業経済に関する最近の研究では、それらがサーヴィス雇用にますます支配されるようになるにしたがい、階級・エスニシティ・ジェンダーを一まとめにし、仕事場でのジェンダー化されたパフォーマンスのあり方の多様性を示す興味深い新しい分析が、男性性と女性性という二項対立的な区別に挑戦しており、有性の身体がアイデンティティの社会的構築に関する新しい考え方を提示するようになっている (Lamphere, Ragone and Zavella, 1997; McDowell, 1997)。例えば、男性性と雇用の不可解な関係そしてその空間的ヴァリエーションに関する新しい問いが細心の注意を要するのは、まさにこの点においてなのである (McDowell, 2000b)。リチャード・セネット (Sennett, 1998) やジグムント・バウマン (Bauman, 1998) のような社会理論家たちは、社会的アイデンティティと新たな労働形態がどのように結び合わされるのか、そして新しい排除と包摂のパターンをどのように生じさせているのか、ということについて刺激的な分析を出版してきたが、その著作は新しいアイデンティティが構築されつつある過程の変動性と多様性の考察を著しく欠いている。そればかりか、そうした理論家たちは、例えば、ジェンダーの差異化、つまり空間的ヴァリエーションを考察していない。二人は男性の生活が変化している過程を重要であると認識しているにもかかわらず、である。ここでの意義深い新しい研究は議論を要する。フェミニストの理論家アイワ・オングが第三世界女性のプロレタリア化に関する社会学的・地理学的な文献の増加という文脈のなかで指摘したように、「工場労働の女性化に関する研究文献は、理論に生きられた現実を取り戻すことを求めている。工業労働者のニュー・フロンティアからの報告は、わたしたちの分析上の構築物と労働者の実際の経験との間のギャップがますますひろがっていることを明らかにしている」(Ong, 1991, p. 279) のである。社会的アイデンティティと職場の経験に関するこうした研究のもっとも重要な含意のひとつは、embodiment、体重、年齢、セクシュアリティ、身体能力、肌の色に関する問題は、経済的問題であるばかりかそれらが経済の基盤であるゆえに社

会ー文化的な問題であり、文化的な相違点でもある、という認識である。それは一連の研究の新しい領域を開拓してきたわけであるが、そのような理論的アプローチと方法論は、いまや普通に、経済の再編、経済的不平等、そして空間的な不均等発展といった現在の諸問題をべつのし方で考察することを促進してきた経済地理学者と文化地理学者の領分となっている。

社会的正義と文化的正義

経済的な抑圧の多様な基盤に関する認識は、正義という伝統的な概念に(Young, 1990)、そして実際には、文化の定義に対しても挑戦している。イーグルトンが述べているように、「マイノリティ集団の正義に文化が関連づけられるようになったのは、まぎれもなく新しい展開である」(Eagleton, 2000, p. 17)。とはいえ、この関連づけは現在のポスト構造主義ならびにポストモダンの正義論の鍵となる教義となっている。それはまた、今日のフェミニストの学者の鍵となる特徴でもあり、そこでは差別待遇と不平等の異なるもろもろの基盤の関係に関する重要な問いが議論されるようになり、例えばデイヴィド・ハーヴェイの研究であまりに問題含みな階級分割を著しく重要なものとみなす前提に挑戦している(Young, 1998)。しかしながら、フェミニストの正義論は、解放のためのプロジェクトにこだわりつづける姿勢によって、ポストモダンのアプローチとは区別される。

正義／不平等について、主要なフェミニスト理論家の間で展開されてきた議論は興味深い。その議論は「単に文化的な」ものを支配する経済という仮定に関するものであり、階級ポリティクスの砦である『ニュー・レフト・レヴュー』の誌面でひろく追究された(Butler, 1998; Fraser, 1997a, 1997b; Phillips, 1997, 1999; Young, 1990, 1997, 1998; また、McDowell, 2000a も参照)。主としてフェミニスト・ポリティクスおよびフェミニスト文化の理論家と哲学者の間で展開されたこうした議論は、経済および経済的プロセスの文化的形成に関する最近の研究を大いに意識することで啓発されているようにわたしには思える。例えば、職業アイデンティティや職場アイデンティティの文化的構築に関して説得力のある経験的研究が最近増えている一方で、経済的・文化的な分割が相互になされる過程について納得のいく理論的分析は為しがたいようである。べつのところで論じたのでここでは詳細に繰り返すことはしないが(McDowell, 2000a)、文化と経済、誤認と不均衡分配の二項対立を超えてゆくのに有用な方法が、ナンシー・フレイザー(Fraser, 1995, 1997a, 1997b)とアイリス・ヤング(Young, 1990, 1997, 1998)の研究に見いだされる。二人の理論家は意見を異にするものの、どちらも「二つの問題構成の解放に役立つ次元を同定し、それらを単一の包括的なフレームワークに統合する」(Fraser, 1997b, p. 4)プロジェクトにコミットしている。脱構築主義フェミニストの文化ポリティクスと社会主義フェミニストのポリティクスの類似性に関するフレイザーの説明は、ユートピア的であるとしても、刺激的なプロジェクトではある。とはいえ、決定的に重要なのは、どちらか一方を選択するというのではなく、どちらのタイプのポリティクスも本質的であると彼女が主張していることだ。これは、リン・セガルが、本稿のはじめに取り上げた著作(Segal, 1999)でとっている立場でもある。

最後の考察——文化で十分なのか——

経済的なプロセスと実践の文化的構築に関する活気に満ちた分析は、今日では経済学そのものとはべつに多くの学問分野に共通して存在しており、経済地理学者にとって重要な新しい論点を提示している。アミンとスリフトは、「最近の大学院生はそれ(経済地理学)から身を引いている。院生たちは経済地理学をダサい分野とみなしているし、できるだけ早く文化地理学のべつの楽しみを味わうためにさっさと行ってしまうのだ」(Amin and Thrift, 2000, p. 4)と挑発的に主張しているが、わたしには悲観的過ぎるように思える。だが、先走る必要はない。というのも、本稿で論じたように、文化分析はいまや経済地理学の中心にあるからである。文化地理学の理論とアプローチは、地理学の分析者の注目を集めているほかのものに有用であるのと同様に、また企業や会社の分析ならびに労働実践にも有用なのである。最近進展している中範囲理論ならびに増加しつつある経済制度に関する具体的で秀逸な事例研究が、政治経済学者そして立地分析者双方の抽象的な理論化に対する意義のある反論を提示しており、「経済的」という語の意味そのものがまさに拡張さ

れ転換されてきたのである。けれども、こうした拡張では十分ではないのかもしれない。批判的経済地理学の中心には、深刻化する不平等を縮減する経済的プロセスそのものの転換方法の構想力がなければならない。それゆえ、ジョージ・マーカスの警告を思い返すことが重要となる――経済地理学者は経済的なものの文化的構築に関する魅力ある革新的な研究にまるごとそそのかされてはならず、資本主義経済プロセスの本質である搾取の分析に対して批判的な鋭さを維持するべく努力しなければならない。しかしながら、「経済的なもの」を構成する諸々の実践の多様性における争いと矛盾、疑わしさと不確かさの理解の構築において、「文化的なもの」への転回はこの点でも、資本制を崩壊させるために革命的変化を悲しげに求めるよりも、可能な変革のポリティクスのよりよい指針となるだろう。だが、ゲオポリティクスにおける脱構築的転回に関するナイジェル・スリフトのコメントのように（Thrift, 2000b)、わたしは、文化経済地理学の中心に物質的実践のみならずそれらの言説的な意味の構築および分析をすえることを主張したいのである。

注

1 セガルは、シェリア・ロウボサムの1970年代の著作が曖昧ながらも率直に女性の多様性と状況に応じた種差性に焦点をあて、また言語をきわめて重要な支配の道具のひとつとみなしている方法を報告している。「おそらくロウボサムはポスト構造主義を知らなかったろうが、彼／女たちが説明する問題についてさほど無知ではなかったことをわたしは指摘するつもりである」、とセガルは述べている（Segal, 1999, p. 19)。

文献

Amin, A. and Thrift, N. (2000) What kind of economic theory for what kind of economic geography, *Antipode* 32: 4-9.

Barnes, T. (1995) Political economy 1: 'the culture, stupid', *Progress in Human Geography* 19: 423-431.

Bauman, Z. (1998) *Work, Consumerism and the New Poor*. Buckingham: Open University Press.

Butler, J. (1998) Merely cultural, *New Left Review* 227: 33-44. ジュディス・バトラー著, 大脇美智子訳（1999）「単に文化的な」『批評空間』II－23.

Clark, G. (1998) Stylized facts and close dialogue: methodology in economic geography, *Annals of the Association of American Geographers* 88: 73-87.

Clark, G., Gertler, M. and Feldman, M. (eds) (2000) *Handbook of Economic Geography*. Oxford University Press.

Coyle, D. (1997) *The Weightless World*. Oxford: Oxford University Press.

Eagleton, T. (2000) *The Idea of Culture*. Oxford: Blackwell.

Fraser, N. (1995) From redistribution to recognition? Dilemmas of justice in a 'post-socialist' age, *New Left Review* 212: 68-93. ナンシー・フレイザー著, 原田真美訳（2001）「再配分から承認まで――ポスト社会主義時代における公正のジレンマ」『アソシエ』5.

Fraser, N. (1997a) *Justice Interruptus*: Critical Reflections on the Postsocialist Condition. London: Routledge.

Fraser, N. (1997b) A rejoinder to Iris Young, *New Left Review* 223: 126-129.

Gertler, M. (1995) Being there: Proximity, organisation and culture in the development and adoption of advanced manufacturing technologies, *Economic Geography* 71: 1-26.

Hanson, S. and Pratt, G. (1995) *Gender, Work and Space*. London: Routledge.

Harvey, D. (1996) *Justice, Nature and the Geography of Difference*. Oxford: Blackwell.

Harvey, D. (2000) *Spaces of Hope*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Hertz, E. (1998) *The Trading Crowd: An Ethnography of the Shanghai Stock Market*. Camridge: Cambridge University Press.

Jones, A. (2000) Deconstructing globalisation, PhD dissertation, Department of Geography, University of Cambridge.

Krugman, P. and Venables, A. (1995) Globalisation and the inequality of nations, *Quarterly Journal of Economics* 110: 857-880.

Lamphere, L., Ragone, H. and Zavella, P. (eds) (1997) Situated Lives: *Gender and Culture in Everyday Life*. London: Routledge.

Lash, S. and Urry, J. (1994) *Economies of Signs and Space*. London: Sage.

Leadbeater, C. (2000) *Living on Thin Air: The New Economy*. Harmondsworth: Penguin.

Lee, R. and Wills, J. (eds) (1997) Gepgraphies of Economies. London: Arnold.

Marcus, G. (ed.) (1998) *Global Futures*. Chicago: University of Chicago Press.

McDowell, L. (1997) *Capital Culture: Gender at Work in the City*. Oxford: Blackwell.

McDowell, L. (2000a) Economy, culture, difference and justice, in Cook, I., Crouch, D., Naylor, S. and Ryan, J.

(eds) *Cultural Turns/Geographical Turns: Perspectives on Cultural Gepgraphy*. London: Prentice Hall.

McDowell, L. (2000b) The trouble with men? Young people, gender transformations and the crisis of masculinity, *International Journal of Urban and Regional Research* 24: 201-209.

Ong, A. (1991) The gender and labor politics of postmodernity, *Annals Review of Anthropology* 20: 278-309.

Peck, J. (1995) *Work/Place*. London: Guilford.

Phillips, A. (1997) From inequality to difference: a severe case of displacement, *New Left Review* 224: 143-153.

Phillips, A. (1999) *Which Equalities Matter?* Cambridge: Polity.

Philo, C. and Kearns, G. (eds) (1994) *Selling Places*. Oxford: Pergamon.

Quah, D. (1997) Increasingly weightless economies, *Bank of England Quarterly Journal* February.

Redclift, N. and Sinclair, T. (eds) (1991) *Working Women: International Perspectives on Labour And Gender Ideology*. London: Routledge.

Rowbotham, S. (1989) *The Past Is Before Us: Feminism in Actions Since the 1960s*. London: Pandora.

Rowbotham, S. (1999) *Threads Through Time: Writings on History and Autobiography*. Harmondsworth: Penguin.

Rowbotham, S., Segal, L. and Wainwright H. (1980) *Beyond the Fragments: Feminism and the Making of Socialism*. London: Merlin Press.

Sayer, A. (1994) Cultural studies and 'the economy, stupid', *Environment and Planning D: Society and Space* 12: 635-637.

Sayer, A. (1995) *Radical Political Economy: A Critique*. Oxford: Blackwell.

Sayer, A. (2000) Critical and uncritical cultural turns, in Cook, I. Crouch, D., Naylor, S. and Ryan J. (eds) *Cultural Turns/Geographical Turns: Perspectives on Cultural Geography*. London: Prentice Hall, pp. 166-181.

Segal, L. (1999) *Why Feminism? Gender, Psychology and Politics*. Cambridge: Polity.

Sennett, R. (1998) *The Corrosion of Character: the personal Consequences of Work in the New Capitalism*. New York: W W Norton and Company.

Smelser, N. and Swedberg, R. (eds) (1994) *The Handbook of Economic Sociology*. Pinceton, NJ: Princeton University Press.

Thrift, N. (1997) The rise of soft capitalism, *Cultural Values* 1: 21-57.

Thrift, N. (2000a) Pandora's box? Cultural geographies of economies, in Clark, G., Gertler, M. and Feldman, M. (eds) *Handbook of Economic Geography*. Oxford: Oxford University Press.

Thrift, N. (2000b) It's the little things, in Dodds, K. and Atkinson, D. (eds) *Geopolitical Traditions: A Century of Geopolitical Thought*. London: Routledge, pp. 380-387.

Weiss, L. (1999) Managed openness, *New Left Review* 238: 126-140.

Young, I.M. (1990) Justice and the Politics of Difference. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Young, I.M. (1997) Unruly categories: a critique of Nancy Fraser's dual systems theory, *New Left Review* 222: 147-160.

Young, I.M. (1998) Harvey's complaint with race and gender struggles: a critical response, *Antipode* 30: 36-42.